

教育事例

# 知識技術を身につけることで得られる介護の魅力 —施設介護実習での学生の取り組み—

矢羽田明美、伊藤希久美 (佐久大学信州短期大学部介護福祉学科)

## Charm of care obtained by learn the basic knowledge and skills —Student of efforts in the care practice in care welfare facilities An attraction of care—

Akemi Yahata, Kikumi Ito

(Department of Shinshu Junior College, Saku University)

**Abstract:** It is essential to learn the basic knowledge and skills through classroom lecture in the field of care working education. Acquired knowledge and skills facilitate students evidence based care. In addition to basic knowledge, practical study helps students to develop individual care skill. Practical education at the welfare facilities is also valuable in terms of implementing the basic knowledge and skills on actual environment. Basic knowledge and skills leads students evoke self-development and obtain worthwhile experience for care work.

**Keywords:** the care, an attraction, a student, care training instruction, basic knowledge and skills

### I. はじめに

本学学生は、2年間の介護福祉士養成課程のなかで、まずは座学にて基本的な知識技術を身につけていく。そして、この基本的な知識技術をもって、施設介護実習に臨み、実際の介護実践に触れ、介護の基本である「利用者の尊厳」「利用者本位の介護」「自立支援」等について考えながら、施設職員とともに、介護実践に参加していく。

石野が、2007年「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正について「介護福祉士に対する社会の期待がそこにあるからであり、介護福祉士の仕事は勘や経験に頼った単なる肉体労働ではなく、他の専門職と同様に、科学的な根拠をもって行う頭脳労働であることが法令からも規定されたわけです。」<sup>1)</sup>と述べているように、座学で得た基本的な知識技術によって裏付けられる、介護の科学的根拠を理解したうえで実践していくことが、本当の意味での「利用者本位の介護」「自立支援」に繋がっていくということである。やはり、基本的な知識技術を身につけたうえで、利用者理解を深めていくことで、勘や経験に頼るのではない、介護の目標である「利用者が望むその

人らしい生活の実現」に向けた支援が出来ることを学生が実感できるような教育的関わりが必要となる。

また、学生は、施設介護実習において、実際の利用者との関わりを通して戸惑いながらも介護過程の展開を実践し、学生なりに「その人らしい生活」について考え、実現に向け努力していく過程を経験する。その中でも、介護福祉士として求められる責任を果たすためには、知識技術を身につけ根拠を持って介護実践することが必要であることの理解を深め、さらには、自信や、介護に対する魅力や、介護の仕事に対するやりがいへと繋がっているのではないかと考える。

今回の報告では、学生の実習中の介護過程の展開の様子と、その結果からみえてくる介護福祉士としての姿勢、基本的な知識技術をもって介護実践を行う事の必要性について、考察・まとめをしていきたいと考える。

### II. 事例紹介

#### 1. 倫理的配慮

この事例を掲載するに当たり、実習施設及び卒業生に説明し許可を得たうえで報告を行うこととした。

## 2. 事例紹介

### 1) 事例 ①

74歳女性。脳梗塞による左半身麻痺があり、移乗は一部介助で行っているが、車いすの自走は可能である。該当利用者は、移乗時に左膝痛を訴えた。学生は、介護者の介入により痛みが生じているのではないかと考え、移乗時の痛みを軽減することを目的に計画を立案した。この利用者は左膝痛があるにもかかわらず左足が軸になる側に車いすをセットして移乗していた。学生は、移乗方法を見直し、軸足が右足になるように車いすをセットし、足を動かす順番を床に足の形で示すことで楽な移乗方法を発見し、移乗の方法をマニュアルにして移乗してもらった。その結果、左膝痛がなくなり車いす移乗ができた。

この学生の援助は、基本的な知識を基にかかわった結果である。しかし、学生の実習が終わると、この利用者の移乗は元の左足を軸にした移乗の方法に戻るといふ現状があった。基本的な知識を有していることが、介護の本質に基づいたケアに繋がると考える。

### 2) 事例 ②

66歳男性。左上下肢麻痺があり、車いすは自走している。生活環境は4人部屋であり、他の利用者が私物を触り、持って行くため特定の利用者に対して攻撃的になり、暴力をふるうことがある。学生は利用者の攻撃的な反応を軽減し穏やかに過ごしてほしいと考えた。そこで、利用者の私物を入れる小物入れを作成し、自己管理できることで落ち着くのではないかと考えた。利用者は木製の小物入れを作りたいと要望したが、学生には高価で準備ができないため、そのことを伝えたことで利用者は、理解を示し学生と一緒に小物入れを作成した。その過程には、利用者との関係を気づきながら、そして対象者の今まで生きてきた人生を一つひとつ紐解きながら、今、その人が生き生きとその人らしく、穏やかな生活を過ごすために、何ができるのか、何をすればよいのかを、利用者と一緒に計画を考えることができた。その結果、小物入れにより私物を管理できることで、穏やかな日々を過ごすことができていく。

### 3) 事例 ③

89歳女性。アルツハイマー型認知症あり。質問に対して簡単な返答はあるものの、自分から言葉を発することがほとんどない利用者である。生活全てにおいて受け身であり、言語で意思表示することがほとんどないため、施設職員も関わりが難しいのではと感じて

いた。しかし、関わっていく中で、自発的な言葉を聞く機会があり、学生は関わりを通してもっと思い（言葉）を引き出すことが出来るのではないかと感じ、受け持ち利用者として担当をさせていただいた。

介護計画立案については、施設職員も積極的に支援をしてくださり、施設周辺の散歩、外出、自発的な言葉を聞くきっかけとなった動物の写真を含め、利用者の生活歴を見ながら今までに興味があったことや好きだったもの、現在の生活において身近な物や散歩に出かけた際の施設周辺の写真等をファイリングし、そのファイルを活用しながらコミュニケーションを図った。様々なアプローチを検討し実践した結果、利用者と言語でのやり取りができ、意志を示す言葉を少しずつではあるが、聞くことが出来るようになった。

発語がないと決めつけ関わるのではなく、疾患に対する理解や、利用者の言動を注意深く観察する視点、認知症に対する知識等をもって関わることで、利用者のできることを引き出す支援につなげることが出来た。利用者の変化に、職員の方も驚かれ、学生もやりがいを感じる事が出来た。

### 4) 事例 ④

90歳女性。アルツハイマー型認知症で、失認、失行症状が強い。食事に興味を持たず食べないため全介助を行っている。学生が観察する中で、利用者は時折、お茶を飲もうとする動作や食器を持つようとする姿が見られた。自分の意思で行っているのではないかと判断した学生は、食べ物に注意を引くような関わりと残存機能の活用を考えた。食事形態は極刻み食、とろみ食である。毎回、食事メニューのイラストを作成し、それを使って説明しながら、食事形態を認識してもらうことで食事に対する興味を持ってもらうことを試みた。その結果、わずかだが興味を示した。いつも関わっている職員には、気づかないことや気づいていてもそこで終わってあきらめていることを、学生は実習を通して、利用者と一緒に時間をかけて関われる。このことが、学生の強みであり、利用者一人一人に寄り添いながら、残存機能を引き出し、活かせるように支援することで変化を起こすことができるのだと考える。

実習が終了して2週間後の大学祭に、施設職員とともに当該利用者も来て下さった。表情もよく、実習で担当した学生が出迎えるとわかっている様子で笑顔で言葉を発していた。施設の方に頂いた写真では、利用者が自力で食事をしている様子があった。学生の力のすごさを感じるとともにこんな体験が介護の魅力であ

ると考える。

### Ⅲ. 考 察

今回紹介した事例は、いずれも学生の「気づき」から始まっている。事例①では、基本的な身体的特徴の理解とそれに合わせた適切な生活支援技術（移乗動作）の理解ができていたことで、基本の動作と何故違うのだろうと気づくことが出来た結果、利用者にあった移乗動作の支援につながっている。事例②では、利用者の行動を観察し特徴に気づき、どの様に支援したら穏やかに過ごせるだろうかを考えた結果得られたものである。事例③においても、利用者を「知りたい」という気持ちを持って関わりを続けるなかで、これまではなかった発語を引き出す事が出来、展開がひろがった。事例④においても、ちょっとした利用者の行動に気づき、自分で食事が出てくるのではないかと考え、積極的に介入した結果、とても良い成果を上げることにつながった。学内で学んだ基本的知識技術を活かしながら、普段関わっている職員では気付かない、もしくは気付いていてもそのままになっている事に、学生なりの気づきや感性を持って介護過程の展開を行い、それぞれに効果的な結果を得ることが出来ている。黒澤は「高齢者福祉に携わる人は、次の3つの聞き方を心がけましょう。すなわち、『人の話は耳で聞け』『人の話は体で聞け』『人の話は心で聞け』です。『耳で』というのは言葉をよく聞きなさい、ということ。『体で』は、態度に注目しましょう、ということ。『心で』は、人間関係など形のないものに注目しましょう、ということです。そのうえで介護職は利用者『共感』します。共感とは相手の気持ちを察することです。察するのは利用者ではなく、介護職です。相手の気持ちに重なり合うことは難しいことですが、介護者が利用者のことを『わかりたいと努力すること』が重要なのです。」<sup>2)</sup>と述べている。利用者のことを「わかりたい」という気持ちを持って、「耳で体で心で」関わったことで、支援を考えていく上で確かな気づきが出来、効果的な結果を得ることにつながったのだと考える。また、座学での基本的知識技術を活かし、利用者をアセスメントする際の根拠を明確にすることが出来ていたからこそ、学生も自信を持って取り組めたのではないかと考える。

今回挙げた事例に限らず学生は、利用者に対し効果的な結果が得られることで、逆にそうでなくても、介護実践に根拠や予測性をもって取り組むことで、得られた結果に対し明確な評価を得ることが出来、その評価をもと

に、今後の方向性を考える事が出来る。明確な評価を得ることは、実践に対しても自信を持つことができ、得られた利用者の変化を感じることで、喜びや満足感を得るとともに、介護の仕事にやりがいや楽しさ、魅力を感じることが出来ているのではないかと考える。

2007年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正により、介護福祉士の定義が見直され、業務規定として「心身の状態に合わせた介護を行う」ことが定義された。読みかえれば、介護福祉士は「利用者の心身の状態を的確に把握する力」が必要であり、把握した内容をアセスメントし、その方の状態にあった介護を提供することが求められている。そのためには、利用者の「今」だけを見ても十分ではない。これからの人生と、これまで利用者がどんな人生を歩み、どんな生活を送ってきたのか、生活歴や昔の趣味、生き生きとしていた時代についても、情報を得る必要がある。自分とはまったく違う背景を持つ人生の先輩である利用者を的確に把握することは、容易なことではない。しかし、学内で学んだ基本的な知識技術に基づいた根拠、広い視野を持って観察することやコミュニケーション技術を活用しながら、利用者に関わり信頼関係を築き、関連するスタッフとの密接な情報共有により、把握し得る範囲は限られているかもしれないが、「利用者を知りたい」という気持ちを持って取り組むことで「その人らしい生活」に近づく事が出来ると考える。また、利用者の言動に対し「何故だろう?」「どうしてこうするんだろう?」「昨日と何か違う?」と、疑問を持ちながら関わり、またその疑問の解決に向け情報を整理していく中で、その方の背景が見えてくる場合もある。学内で、基本的な知識技術を学んでいるからこそ適切な疑問や気づきを得る事が可能であり、解決に向け根拠を持ったアセスメントが出来る。実習は、これが1対1で出来る貴重な機会であり、利用者と共に過ごすことが出来る学生だからこそ見つけられる視点や発見もそこにはあるのではないかと考える。

筑紫らは、「介護は実践の科学であり、実践を通して学ぶことの意義は大きい。また、実習を通して介護福祉士として多きく成長するのであり、専門職業人として育つのである。」<sup>3)</sup>と述べている、また、黒澤は「経験によって知識を活かすことができ、知識は経験を豊かにします」<sup>4)</sup>と述べており、学生は学んだ知識技術を実践の場で最大限に活用し、利用者個々に合わせた支援を行い、そして、黒澤は「利用者」と介護職は、互いに未知の世界を二人の関係性の中から探っていき、互いに問いかけを繰り返してより良き生活へとたどり着くことを目指して

いきます。』<sup>5)</sup>と述べており、筆者は、学生は利用者との関係性を築きながら、利用者がその人らしくいられることを目指した支援を心がけて実践しているのだと考える。黒澤は「介護は、人間の価値や人権の尊重といった知識をもち、適切な技術を身につけたうえで、さまざまな出会いのなかで自らを問い、一生かけて考えていく」<sup>6)</sup>と述べており、知識技術を学ぶことで得られる介護の魅力を感じられるような、実習支援体制・実習施設と学校間の連携体制を構築していくことが必要である。

#### IV. まとめ

基本的な知識と技術をもつことで、利用者を広い視野で観察することが出来、気づきを得ることが出来る。あわせて、得られた情報を関連付けながら利用者の現状を解釈分析することで、根拠に基づく介護を提供することが出来る。根拠・予測性をしっかり持って関わるからこそ、得られた結果だけに捉われことなく、そこにやりがいを感じる事ができ、自信を持って介護実践できると考える。

黒澤は「生活支援学は、国家の示す憲法の理念に沿って、人々の生活の幸せを具体的に実現する学である」と述べたうえで「生活支援学は、この理論と実践の統合の命題を解明する必要がある。(中略)すなわち、理論は実践から生まれるものである。同時に実践は理論の力をもってはじめて信頼妥当性を持つことになる」<sup>7)</sup>と述べているように、理論と実践を統合させ、専門性の高い魅力ある分野として、社会的認識が得られるよう介護福祉士養成教育を充実させていく必要があると考える。実習の場においては、指導者や職員の方が、学生の可能性に掛けて見守りながら関わってくださっている。そのこと

も、学生の実習成果につながり魅力となっていることも確かである。今後も、実習担当職員と情報を共有しながら、良い学習環境の提供、知識技術を学び身につけることの大切さを伝えられるよう、努力をしていきたいと考える。

#### V. 謝 辞

施設介護実習に携わる全ての方、今回の発表において、ご協力をいただいた利用者・ご家族・施設職員・学生に対し、心より感謝申し上げます。今後も、介護の魅力を感じられるような介護福祉士養成にむけ努力を重ねていきたいと考える。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 石野育子編著：最新介護福祉全書7 介護過程、メジカルフレンド社、まえがき、2014年
- 2) 黒澤貞夫「介護は人間修行——一生を掛ける価値ある仕事——」日本医療企画 2016年 p44
- 3) 介護福祉実習指導研究会編集筑紫常男発行：介護福祉選書18 新版介護福祉実習指導、建帛社、p1、2008年
- 4) 黒澤貞夫「介護は人間修行——一生を掛ける価値ある仕事——」日本医療企画 2016年 p17
- 5) 黒澤貞夫「介護は人間修行——一生を掛ける価値ある仕事——」日本医療企画 2016年 p106
- 6) 黒澤貞夫「介護は人間修行——一生を掛ける価値ある仕事——」日本医療企画 2016年 p12
- 7) 黒澤貞夫：生活支援学の構想、川島書店、p20～21、2006年